

タイトル：循環型社会とサーキュラーエコノミー～市民意識・生活の変化から～

講師 関口昌幸さん（横浜市政策局共創推進課）

日時 11月9日（火）20：00～21：30

場所 オンライン開催

主催 横浜市大同窓会

【内容】

横浜市が抱える問題について

①単身世帯の増加、中でも 30-40 歳代の女性単身世帯が増えて、それまで家族が持っていたケア機能（PTA 活動や自治会活動など）が減少し、地域やボランティア活動などがぜい弱化している。②気候変動による風水害や、想定外の感染症によるパンデミックのリスクが高まっている。③将来に不安や心配を抱える人が増加などについて説明があり、現代は、安心・安定なき日常を生きる社会となっている。

SDGs について、17 の目標の先の 169 のターゲットについてはよく知らない人が多いそうで、見せかけの SDGs（SDGs ウォッシュ）とも言われているとか。

しかし、SDGs を掲げてのビジネスは増えており、本業を通じて社会貢献をしようという企業も次々に現れている。日本が「2050 年までに脱炭素社会へ」という共同声明を米と出したのは日本の意識を変えたのではないか。横浜市にも今年 6 月には全国初の「横浜市脱炭素社会の形成推進に関する条例」ができ、サーキュラーエコノミーの推進に道筋がついた。サーキュラーエコノミーは、廃棄されていたものや未使用のものを資源と捉え、積極的に取り込み、環境にも経済にも持続性を持たせるものと欧米では位置づけられているが日本でも同様に考えられているよう。

横浜では 15 のリビングラボが活発になっている。他のリビングラボと違うのは住民が中心で、そこに地域事業者や大学などが参画していく仕組み。地域に拠点を置き、住人と事業者とが対話をし実証実験を重ねている。市はリビングラボ・サポートオフィスをつくり、サーキュラーエコノミーを官民共生の取り組みにしていく計画。欧米では環境面が中心だが、横浜市は「人とまちの持続可能なエンパワーメント」を標ぼうし、気候変動にも対応していくスタイル。

【事例①】

金沢区のアマモ・アオサの堆肥化について説明。市の事業化ごみを堆肥化する市の環境保全に加えて他区からの関心が高まり、今後研究会/研究集団をつくり有機堆肥を開発して、サーキュラーエコノミーに発展させようという動きがある。

【事例②】

飲食店が基軸となり地元食材を生かして弁当を作り、孤立した高齢者支援などにつなげる。今後、子どもの見守り活動と連携させて実現を目指している。地産地消を可能にする市のフードループを作ろうとしている。

【事例③】

神奈川大学サッカー監督（で職員）大森さんも参加。

緑区の竹山団地内空き家に学生が住み込んで、コミュニティ・ケア（高齢者と学生）や交流を実践。神奈川大学と住宅公社の間に協定書を交しスタート。スマホの操作を通して交流が盛んになり、健康についての質問なども出てきていることから、たとえば「スマホ体操」とかできるようなスマホセンターを作ろうという動きもある。

教育の面からの効果もあるそうだ。学生は、今は「なんでこんなことやってんの？」と聞いてくるが、高齢者との生活のなかで、人間性の良い面がはぐくまれていると監督は言う。また、緑区は小松菜が名産で、それを生かして緑のカレー「竹山カレー」を作ろうなどと話が出ているそう。竹山団地には「芋煮会」「餅つき」もまだ残っているので、そういう文化の継承も学生たちが担えるかもしれないとも。

【ディスカッション】

講演後のディスカッションでは愛媛県や兵庫県からの質問や感想もありました。

江戸時代の人糞からの有機堆肥はじつはSDGs活動と同様であった！

災害時の避難所（戸塚リビングラボ）の取り組み。金沢区には金沢産業団地や並木団地もあるので、学生と繋いでいけるのでは？とか。「つなぐ人」の重要性については、横浜市リビングラボには「人が繋がって広がる」仕組みがあるので、行動が広がっていくとのこと。

今回も充実したセミナーとなりました。